

ウルトラマンマックス

最終回後編

つかみとれ！ 未来

第四稿

脚本／小中千昭

TelePlay by Chiaki J. Konaka

2006／01／07

登場人物

トウマ・カイト

コイシカワ・ミズキ

コバ・ケンジロウ

シヨーン・ホワイト

エリー

ヒジカタ・シゲル

ヨシナガ教授

トミオカ長官

オートマトン 機械人形（デロス）

機械獣 サテライト・バーサーク（小型バーサーク）

機械獣 ギガ・バーサーク（対ウルトラマン 巨大型）

ウルトラマンマックス

○前話フラッシュ・モンタージュ

N 「謎の地底文明デロスは、地上の人間によって地球環境が
変わった為滅びようとしていた。デロスを保護するバー
サーク・システムは世界各国のDASH基地が破壊し、
地球環境を太古に戻そうとし始めた。デロスと交渉する
為、地下深くに潜ったカイトとミズキは——」

○前話リプライズ／デロス都市

ミズキ「(苦しげに) 御免ねカイト——、あたし、やっぱり……」
カイト「何を言ってるんだよ」 諦めるなよ」 ミズキ」

○前話リプライズ／臨時司令室

エリー「ミズキ隊員の生命反応が停止……」
コバ+ション+ヒジカタ+ヨシナガ「」
エリー「(強張った表情のまま) ミズキ、隊員が……」

○デロス都市

カイトの悲痛な叫びが、ネクロポリスの如き巨大空
洞内に響き渡る。

カイト——、自らの意志で冷静さを必死に取り戻す。
カイト「——ミズキが死ぬ運命なんて、俺は認めない——」

カイト、ミズキのスーツの前を少し開き、両掌を当
て、救急蘇生法に従って心臓マッサージを始める。

カイト「(魂を込めて押し) ミズキ——、帰って来い—— (涙が
零れ、ミズキの顔に落ち) 一緒に——生きるんだ」(必
死に押し続け) これからも——ずっと——一緒に——」
何度目かのプッシュ後、僅かに反応するミズキ。

○臨時司令室

エリー脇に浮かぶ仮想ウインドウのヴァイタル・サイン、ミズキの直線に僅かな山が描かれる。

エリー「！」

○デロス都市

カイト、ミズキにマウス・トゥ・マウスの人工呼吸。必死にミズキを取り戻そうとしているカイト……。そのカイトを見つめるバーサークの周囲に、何時の間にかオートマトンが数多く集まってきていた。無数の人工の眼が、カイトを凝視している。

ミズキ「（呻く）」

カイト「……（安堵）ミズキ……」

ミズキ「……、薄く眼を開き……」

ミズキ「……（吐息）カイ、ト……」

泣き笑いのカイト……。

○臨時司令部

ミズキのサイン、回復。

エリー「——ミズキ隊員の生命反応、復帰——」

安堵する一同。

と——、エリーの目から零れる涙。

エリー「予測、外れた……。 （微笑）」

エリーの反応に、やや驚くヨシナガ。

と！ ココからコアが自ら離脱する。

ヨシナガ「！ オートマトンのコアが——」

○デロス都市

ミズキを抱き起こすカイト——、オートマトンに囲まれてる事に気づく。

カイト「——!？」

無言で見つめるばかりのオートマトン。

カイト「——地上の人間のせいだ。君たちが苦しんでいるのは判った。俺たちに時間をくれ。地上の人間だって、オゾン層が消えたら生きていけないんだ」

と、オートマトンの一体が前に一歩出て——、突如からくり仕掛けの様に展開、コアが露出する。

カイト「——」

コアから投影されるホログラム。それは、元気な時のデロスの、ドワーフの様な姿。

デロス「カイト、あなたがその人を助ける姿を見て、デロスは後悔しています」

ミズキ「え……」

デロス「地上の人類も、生命を大切にするという事を認識しました。しかしデロスは既にバーサーク・システムを始動させてしまいました」

○臨時司令室

ここにいるコアも、デロスのフォログラムを投影していた（地下のデロス達の意識が共有されている）。

デロス「バーサーク・システムは、デロスを護る為にはあらゆる障害を排除します」

シヨーン「太陽の有害な放射線を遮る方法を僕たちが考えるよ！」

コバ「そうだ！ オゾン層だって復活させる。時間をくれ！」

デロス「我々にはもう、バーサークは止められないのです」

険しい顔の隊員達。

デロス「ウルトラマンマックスもまた、バーサークの攻撃対象となっています」

○デロス都市

デロス「マックスの能力はバーサークによって解析されています」

▼前話フラッシュ／機械獣対マックス

デロス「バーサークはマックスを確率100%で倒します」

カイト「――（不敵に笑み）その予測も、外れになるさ」

カイト、マックス・スパークを掲げる。

ミズキ「――カイト……？」

カイト「戻ろう、俺たちの世界に」

ミズキ「――あたし、知ってた気がする――。カイトがマックス
だって事――」

カイト、ミズキを抱く左腕にマックス・スパークを
装着！

等身大のマックスに変身したカイト――、飛翔。

○地中

マックス、地上に向かって上昇していく。

マックスに抱かれるミズキ、マックスの顔を眩しそ

うに見上げ――

ミズキ「カイト――、ずっとマックスとして戦ってきたんだね。

あたしたちが出会ったあの時から――」

▼マックスの過去の闘い、高速にフラッシュバック。

ミズキ「――いつか人も、マックスみたいに遠い星に行ける――。

きつと――」

マックスの体、光に包まれる。

○東京湾岸

尖塔の基部が展開。巨大な影がその中に蠢いている。

○太平洋沖

海中から光に包まれたマックス、飛翔。

日本に向かって飛ぶ。

○東京湾岸

尖塔から現れ出る巨大なる異形の機械獣

○臨時司令部

モニタに映るギガバーサーク。

デロス「ギガバーサークは、マックスを倒す為にバーサーク・システムが作り上げたものです」

エリー「マックスが日本に向かってきます」

ヒジカタ「——（デロスに）この地上を護っているのはマックスだけではない。DASH、出動！」

コバシヨーン「了解二」

○東京湾岸／地上

飛来したマックス、着地し、そっとミズキを降ろす。
上空を飛ぶバード1、2。

と、ミズキの許にDASHアルファが降下してくる。

○臨時司令部

モニタを見つめるトミオカとヨシナガ。

ヨシナガ「——ウルトラマンは勝てるかしら……」

トミオカ「——信じよう——」

○東京湾岸

マックスの何十倍もの大きさのバーサーク、その前に毅然と立つマックス。

N 「マックスが変身して既に二分が経過していた。あと一分。マックスにはそれしか時間が残されていない」

バーサークの巨大な腕が襲いかかるが、かわし——

○地上

アルファから飛び出し、ミズキを救出に来たのは、
エリーだった。

ミズキ「エリー——」

エリー「ミズキ隊員——、また会えて、とっても嬉しい」

微笑むミズキ。——と！ 激しい衝撃音。

○東京湾岸

ギガバーサークから伸びた鎖がマックスを磔の如き
姿に持ち上げ、頭頂部に三点で固定。

必死にもがくマックスのパワータイマーが赤色明滅。

と！ 飛来するバード1、2。

○バード各機コクピット

ショーン「ビームもミサイルも、使えば高濃度酸素で被害が広が
ってしまう」

コバ「(不敵に)そういう時に使える手は、これしかない！」

ショーン「(ニヤ) Okay!!」

○東京湾岸上空

バード1、2、アタックモードに変形。

コバ「(オフ)ウイング・ブレード・アタック！」

マックスを捕らえている鎖に体当たり攻撃。

と！ 液体金属が射出され、バード1に襲いかかる。

○バード1コクピット

コバ「(渾身の力で操縦桿を引き) どあああああつつつつ」

○東京湾岸

辛うじて影響圏から離脱するバード1。

一方のマックス、パワータイマー激しく明滅。

○赤いゾーン

マックスと同一になっているカイトの意識世界。

マックス「(オフ)カイト——。もう私にはエネルギーが無い」

カイト「マックス!!」

マックス「(オフ) M78星雲に戻る為の最後の力も尽きてしま

った。このままでは君の生命も失われてしまう。カイト、

私から分離するのだ」

カイト「そんな！ 最後まで一緒に戦うんだ!! マックス!!」

○クレーター内

鎖に絡まれている右腕を、必死に上に伸ばし、

マックスギヤラクシー召喚。マックスは左腕を次に

伸ばし、マックススパーク部からギヤラクシーにビ

ームを照射。そして——、力尽きるマックス。

パワータイマー、そして眼から光を失い——、全身

錆びて赤黒く変色し——、動かなくなる。

○地上

マックスギヤラクシー、地上に落下。

その中央の青い部分から光に包まれたカイト、離脱。

カイト「(振り向き見上げ) マックスウウウウ!!!!」

○各所

トミオカとヨシナガ——、コバとショーン——、ミ

ズキとエリー——。恐ろしい現実を直視——。

カイト「マックスが——」

○世界各国の尖塔

何処の尖塔もテスラ電光を放ち、地球の大気を変えようとしている。

N 「バーサークの影響は世界全土に及びつつあった」

○無人の東京／夕刻〜夜

N 「都市近郊の発電所は停止を余儀なくされ、交通機関も停止した——」

オートマトンは、鉛色の空を見上げるばかり。

○磔になったままのマックス／夜明け

○UDFハンガー／午前

格納庫には、赤く錆びついたマックスパークが、バードに並んで置かれており、UDF隊員がその周囲を慌ただしく立ち回っている。

○医務室

ベッドにいるミズキ。その手を握っているカイト。

ミズキ「(譫言)カイト——、あたしたちの——未来——」

カイト「——大丈夫。俺たちはきつと、未来を掴む——」

と、傍らのモニタに浮かぶエリー。

モニタ内エリー「カイト隊員、オペレーション・マックスを開始します」

立ち上がるカイト。強い顔で——。

○臨時司令部

整列しているDASH隊員。

ヒジカタ「これより、ウルトラマンマックス救援作戦を開始する」
モニタに浮かぶハンガーのマックスギヤラクシー。

エリー「このマックスが使っていたデバイスは、解析してみると太陽と同じ核融合エネルギーをマックスに伝えていた事が判りました」

ショーン「だからあのデバイスを通して、マックスに再び太陽の光を伝えるんだ」

コバ「しかしどうやって……。今この基地ですらエネルギーがヤバくなってるのに」

ヨシナガ「(ニヤリ)地上はそうだけど、エネルギーならあるわ(と指を上を指す)」

コバ「太陽？ でもそれをどうやってエネルギーに……」

カイト「——！ ガーディアンか！」

○衛星軌道

UDF衛星が、日本が見えるエリアに集結している。

○臨時司令室

モニタには、UDF防衛衛星の位置が図示。

エリー「ガーディアン、スタンバイ出来ました」

ヨシナガ「衛星から、太陽エネルギーを変換し、この基地に集約してデバイスに伝えるの」

カイト「なるほど……。でも、マックス・ギャラクシーをどうやってマックスのところまで——」

ヒジカタ「ギャラクシー——？」

カイト「あ、いやあの、そうマックスが言っていたんです」

コバ「それは俺たちがやるのさ！」

ショーン「Yeah, right! この基地のレセプター・アンテナに受けたエネルギーは、カーボン・ナノ・チューブで出来たケーブルである、Max Galaxyにコネクして——」

ヒジカタ「バード二機でギャラクシーを牽引、マックスに届ける」

ヨシナガ「問題は、あのギガ・バーサークがそれを邪魔しないかという事」

コバ「——やってやる。俺たちは今までずっとマックスに助け

られきた。今度は俺たちがマックスを助けるんだ！」

カイト「(強く頷く) そうだ……。やりましょう！」

トミオカ「これは、我々地上人類にとって、唯一残された手段だ。エネルギー供給が完全に止まれば、病人や子どもといった弱い者たちから犠牲になっていく……」

険しい顔になるDASH隊員。

トミオカ「地上人類は怠慢にも、生活を豊かにする為にこの地球を汚し、デロスを犠牲にしてしまった。この試練を越えた時、我々人類がしなければならぬ努力は大きい……。だが、我々が生き延びてこそ、その未来は切り開ける。頼む、諸君」

敬礼するヒジカタ以下DASH。

ヒジカタ「オペレーション・マックスを開始する！」
隊員「了解！」

○衛星高度

UDF防衛衛星、太陽の光を集光板に受ける。
近辺の衛星も一斉に集光板に太陽光を受けている。

○浦安UDFハンガー／外観

巨大パラボラアンテナ、天空よりの光を待ち受ける。

○格納庫

カイトのバード1、コバのバード2が浮上。ケーブルでギャラクシーを牽引。
浮かび始めるギャラクシー。その後端には、電導ケーブルが繋がれている。

○臨時司令室

ヒジカタ「バード1、バード2、発進せよ」

カイト+コバ「(無線ノオフ)了解！」

エリーの脇にはシヨーン。

エリー「全ての衛星がビームを集約した場合、レセプター・アン

テナは85秒しか保ちません」

シヨーン前のモニタには、エネルギー出力の3Dグラフ。有効な出力エリアが明示されている。

シヨーン「やるしかない！ エリー、ビーム照射スタンバイ」

エリー「了解(光彩が激しく動き、コマンド発令)」

○東京湾岸上空

バード二機、ギガ・バーサーク近くに接近。

○臨時司令室

ヒジカタ「シヨーン、ビーム照射！」

シヨーン「Come on, Max! 蘇ってくれ!! (Enter Key)」

モニタに表示「Solar Ray Beam Irradiate.」

出力グラフの狭いエリアに納まるべく、シヨーンはトラックボールとテンキーで細かく調整。

○衛星高度

UDF衛星、一斉に日本に向け、ビームを発射！

○UDFハンガー

アンテナに集約される強烈な光の柱。

アンテナ基部から伸びる電導ケーブル、エネルギーを受け発光。

○東京湾岸上空

電導ケーブルに高速で伝わるパワー、ギャラクシー

に届き、錆びた外装の隙間から黄金の光が漏れだす。

○各機コクピット

カイト「よし！ パワーが届いた！」

コバ「カイト！ 危ない！」

○東京湾岸上空

ギガ・バーサーク、液体金属攻撃を仕掛けてくる。

○各機コクピット

コバ「(ミサイル発射) うおおおおおおお！」

カイト「！ コバ隊員！」

○東京湾岸上空

発射されたミサイル、高濃度酸素の為に自らの噴射で誘爆。空中に起こる爆発の中を縫って進むバード。

コバ「(オフ) 判ってる！ 高濃度酸素ン中だって事はよお！」

○各機コクピット

爆発で揺れる両機内。

コバ「(不敵に笑み) カイト！ しっかりついて来い！」

○東京湾岸上空

黒煙で見えなくなるバード二機——。と——
あらぬところから黒煙を抜けて出てくるバード二機。

○臨時司令部

ヒジカタ「(ニヤリ)コバ——、やるな……」

と！ あまりのパワーに、ショーン前のパネルがシ
ョートし、ブラックアウト。

ヒジカタ「!! ショーン!?!」

ショーン「We NEVER give it up...」

ショーン、強い意志の顔ですぐに立ち、パネル後方
のマシンラックに走り、焼けた基盤を抜き出す。
即座にエリー来て、指を基盤スロットに差す。

ショーン「(笑み) Thanks, Elie」

エリー「(頷き)あと、23秒——」

○東京湾岸上空

バーサークが放った液体金属、バード2のケーブル
を断ち切ってしまう！

コバ「(オフ)くそう!!」

ヒジカタ「(無線/オフ)カイト！ カイト！ 無理するな！」

○バード1コクピット

必死に制御しようするも、一機では重すぎる。

ヒジカタ「(無線オフ)一機じゃ無理だ！ ケーブルを切れ!!」

カイト「ここまで来て——。あきらめるか！ 俺だって——」

カイト、ベルトを外し、キャノピーをリリース。

カイト「俺だって、マックスなんだ!!」

○東京湾岸上空

緩やかに降下していくギャラクシーとバード1。

バード1から飛び下りるカイト。

ギャラクシー中央の青い部位に向かって姿勢制御し、
カイト「だああああああっっ!!!!」

○バード2コクピット

コバ「カイト」カイトオオオオオ」

○東京湾岸上空

カイト、青い部位に溶け込む。
と！ ギャラクシー、一際輝き不死鳥の如き姿とな
って飛翔。輝くケーブルを引きながら――

○病室

ミズキ「（ハッと気づき）カイト――！」

○東京湾岸

ギャラクシー、マックスの腕に収まり――、マックスの全身にパワーが伝わる。パワータイマーが青い光を取り戻し――全身が眩い光に包まれる。
自らを磔にしていた機械腕を破碎！

○各機コクピット／臨時司令室

トミオカ「おお！ 復活した」
ション「カイトが、マックス」
ヒジカタ「――そうか――、カイトが――」
エリー「――（微笑）」

○東京湾岸

復活したマックス――。全身に漲る力を光で放出。
するとマックスの姿、ギガ・バーサークに拮抗する程までに巨大になる。
ギャラクシーを光の剣に変え、向かってくる機械腕を次々と斬り落とし、遂には本体を切り裂いた！

バーサーク「(無感情に)バーサーク・システム、停止……」

○各所

コバ「っしやああああ！」

ヒジカタ「——(頷く)」

○東京湾岸

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ——

地中に埋没していく尖塔。

デロス「(オフ)デロスは地上の人類達に期待しよう。地球が元の姿を取り戻すまで、デロスは再び眠りにつく——」
マックス、カイト、その声を聞いている。

○臨時司令室

ショーン「(気が抜けて) We did it! Yes!!」

エリー「世界各地のバーサーク・システム、活動停止を確認」

トミオカ、ヨシナガと頷き合う。

○東京湾岸／夕刻

黄昏の光を浴びて立つマックス——。

○赤いゾーン

マックス「カイト、ありがとう」

カイト「——こちらこそ、今までありがとう」

マックス「地球の未来は君達自身でつかんでくれ。お別れだ」

カイト「——(込み上げる気持ち)」

○東京湾岸／地上

マックス・スパークから光を放ち、地上にカイトを

降ろすマックス。

そして、マックスは飛翔。

カイト「(手を振り)マックス——！」

○宇宙

月の近くにて、飛翔してきたマックスを迎えたのは、ウルトラマンゼノン。二人は頷き合い、そして共に故郷へと旅立っていく。

○UDFハンガー敷地

独り、歩いて帰ってくるカイト——。

カイト「——！」

カイトを出迎え、待っていた仲間達。

カイト、満面の笑みで、手を振りながら駆け寄る。

車椅子のミズキ、輝く笑顔で——

喜び合うヒジカタ、コバ、ショーン、エリーとココ。

カイトとミズキ、微笑み、見つめ合う。もう判っている、お互いの熱い気持ち——。

闘い抜いた勇者達を、温かく見守るトミオカとヨシナガ——。

茜色だった空は群青に染まり、一番星が瞬いた。

広がりゆく星空を、見上げるチームDASH。

カイト「マックスは、自分の故郷に帰りました」

ミズキ「さようなら——、マックス——」

ショーン「帰っちゃったのか……。寂しいね」

コバ「マックス——、後は俺たちに任せてくれ——」

ヒジカタ「——そうだな……。地球の未来は、我々人間が自らつかみ取らねばならない」

エリー「(見回し)? ココどこ?」

ココ、何時の間にか、一同が並ぶ前にいた。

くるりと振り向き——、LEDライトを強く照らす。

FO

○未来の東京湾岸

S「2076年 東京」

復興された東京湾岸。新しいベース・タイタンの最上部、宇宙航行ハンガーには、流線型の銀色の宇宙船が今発進しようとしていた。

○ベースタイタン／宇宙航行ハンガー

見送る上官らに敬礼する航宙士——、振り向く。

カイトの孫「では、銀河系観測に向かって出発します」

と、エリー、にっこりと微笑み

エリー「行ってらっしゃい。私は30年後でも待ってますから」

カイト、頷き、宇宙船に搭乗。後を追っていくココ。

○超高層ビルテラス

落ち着いた雰囲気のある部屋。アンティークなサイドボード上の立体プログラム写真額縁の中では、楽しいなチームDASHのメンバーの姿が。そして——、窓テラスでは、老夫婦が並んで外を眺めている。窓の向こうには、ベース・タイタン。

カイト「私達の孫が、とうとう宇宙に向かって旅立っていくよ」

ミズキ「——マックスに会えるかしら？」

カイト「会えたら伝えて欲しい言葉があったんだ」

ミズキ「なあに？」

カイト「——私達は未来をつかめたよ、って——」

握り合う手。

空に向かって線を描き、飛び立っていく宇宙船。
地球がウルトラの星になる、第一歩を歩みだした。

ウルトラマンマックス 完